

遊びを通して学びをはぐくむ保育の研究

—3歳児保育を中心に—

葛城市立磐城小学校附属幼稚園 教諭 蟻 田 美 園

Arita Misono

要 旨

幼児は幼稚園という集団生活の中で直接体験をしながら様々なことに興味や関心をもち、仲間との生活を楽しんでいく。そこで、日々の生活を通して幼児が多くの人や物とかかわり、自己発揮をしていくために必要な援助の在り方について、3歳児を中心に考察した。

キーワード： 幼児教育、幼児理解、援助、生活経験、言葉掛け、環境構成、豊かな心

1 はじめに

幼児の大半は入園によって初めての集団生活を経験する。人的環境である保育者や友達、幼稚園という物的環境にかかわることで発達に必要な経験をし、生きるために必要な力を付けていく。しかし、近年の少子化傾向や核家族化、価値観の多様化など幼児を取り巻く環境の変化により、同年代の友達とかかわれない、遊べないなどの状況や、親の子育て不安といった現実を抱えていることも実状である。そこで、幼児が友達と喜んでかかわり、一緒に遊びを楽しむようになるためにはどのような経験が必要か、保護者が自信をもって子育てをするためにはどのような連携をすればよいかを実践を通して考えていきたい。

2 研究目的

毎日の幼稚園生活やいろいろな遊びを通して3歳児がより多くの人や物と出会い、心身共に豊かなかわりをするための保育の在り方を研究する。

3 研究方法

- (1) 研究主題についての理論研究
- (2) 保育を通しての実践と考察

4 研究内容

幼児は保育者の受け入れと理解による温かい人間関係の中で人や物と出会い、いろいろな経験を楽しみながら生きる力を付けていく。そこには、幼児の発達に応じた段階的な活動と援助、保護者との連携が重要な役割を果たしていると考えられる。そこで、次のような点に配慮しながら実践を進めた。

(1) 段階的な援助

1学期 — 1期 4・5月

・ 幼児が幼稚園になじみ安心して生活できるように一人一人をありのまま温かく受け入れる。

2期 6・7月

・ 友達への関心をもてるように、保育者が様子や気持ちを伝えていく。

2学期 — 3期 9・10・11・12月

・ 友達と同じ遊びを楽しみ、互いの思いに気付けるよう仲立ちをする。

・ 4・5歳児に誘われて一緒に遊ぶ楽しさや遊びの刺激を受けられるような経験の場を作る。

3学期 — 4期 1・2・3月

- ・自分のしたい遊びを友達を誘って楽しめるよう、時間と環境を整える。
- ・3歳児なりの仲間意識がもてるよう友達の思いへの気付きや友達といることの喜びを認める。

(2) 保護者との連携

- ・3歳児は個人送迎となる。そこで、登降園時、幼児の様子を伝えたり保護者から話を聞いたりしてコミュニケーションを重ね、気軽に話ができるような関係をつくっていく。
- ・定期的に発行している“学年だより”や“子育てひろば”、毎月末に出席ノートに書く幼児と保護者へのメッセージを通し、幼稚園で大切にしていることや一人一人の育ち等を伝えていく。
- ・それぞれ年2回実施している個人懇談と学級懇談を大切にす。個人懇談では、子どもの成長や担任の思いをしっかりと伝える。学級懇談は、保護者同士が交流し、子育ての思いや悩みを出し合える場としていく。

なお、本園は、3、4歳児各2クラス、5歳児3クラス、総園児数180名、担当クラスは3歳児19名（男9名、女10）である。本論では、集団と個の両面に注目し、担当のクラス全体と、入園時に集団になじみにかかったA児（1月生れ男児）へのかかわりや様子、変容を取り上げ、考察していきたい。

5 研究結果と考察

(1) 1期（4・5月）の取組

ア ねらいと内容

- 安心して登園し、保育者に親しみや信頼感をもつ。
 - ・喜んで登園する。 ・自分のクラスが分かり、担任や友達に親しみをもつ。
- 生活の流れやリズムが分かり、園生活に慣れる。
 - ・一人一人が安定する場所を見つけて生活する。
 - ・日常の生活習慣や片付けなどを、手伝ってもらいながら少しずつ覚え、身に付けていく。
- 好きな場所や好きな遊びを見つけて遊ぶ。
 - ・園内のいろいろな場所を知り、安心感をもって過ごす。
 - ・いろいろな遊具の使い方を知り、遊びに興味をもち、自分から遊ぼうとする。
 - ・土や砂、粘土の感触を楽しむ。
- 保育者や友達と一緒に歌や手遊びを楽しむ。
- 年長児に手伝ってもらいながら身の回りの始末をする。また、年長児に親しみをもつ。

イ 保育実践より

(ア) クラス全体（5月ごろ）〈おはようございます〉

「〇〇ちゃん、おはようございます！」「あっ、先生、おはよう！」「元気な声やねえ。よく聞こえたよ。朝のあいさつ、大きな声でしたら気持ちいいね。」と笑顔で出迎える。「お母さん、部屋でも出席確認の時大きな声でお返事してくれるんですよ。」と、少しずつ園生活に慣れてきたことを保育者自身の喜びとして伝えていく。

- ・幼児が喜んで入室できることは保護者にとって安心できることである。
- ・幼児の成長に伴う変化やエピソード、よさを保育者自身の喜びとして保護者に丁寧に伝えていくことで互いに信頼し合える関係を築いていくことができる。

(イ) A児（5月ごろ）〈かえる好きやねん〉

小動物が大好きで登園後は持ち物の片付けもそこそこに、観察ケースのかえるやさわがにをじっとのぞき込んでいる。終始無言であるが、しっかり目で追って楽しんでいる。「かえるさん好きやねえ。」「うん、ぼくの家にもいるねん。」「へえ、どこで採ったの？」「田んぼにいてん。おたまじゃくしも採ってんで。」担任がそばで見ていると、時々ぼつぼつと小動物のことを話してくれる。

- ・A児にとって小動物がいる環境はおうちの延長であり、ゆっくり小動物にふれることで気持ちが落ち着くようである。そこで、廊下にケースを並べ、見て触れて遊べるようにするとともに、一緒に見て

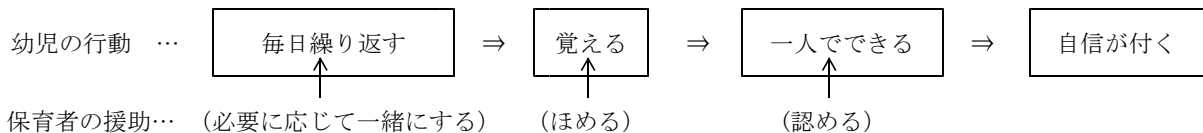
いる友達とイメージがつながり遊びが広がるように仲立ちをする。また、ほかのクラス担任にもA児のことを伝え、受け入れてもらえる環境を作った。

- ・小動物という好きな場所ができることで幼稚園に来ることを楽しめるようになってきた。そこで、小動物と出会える喜びや幼稚園の楽しさを保育者も共に喜び合うようにした。また、A児の興味・関心が基本的な生活習慣につながってくれればと考え、A児がリュックを下ろして小動物を見に行こうとする前に、持ち物の始末を誘いかけ、一緒にした。

ウ 保育者が大切にしてきたこと

(ア) 保育者に頼りながら幼児が新しい環境や生活に慣れていけるように援助する。

- ・持ち物の片付けや生活の仕方などの手順を繰り返し知らせ、必要に応じて一緒にする。



(イ) 安心して自分のしたいあそびができる環境づくりを心掛ける。

- ・環境

{	人的環境 保育者 — 幼稚園のお母さん …優しく受け入れ、子どもの気持ちを理解する。
}	物的環境 遊びや生活の場 — 家庭の延長…なじみのある遊具を準備しておく。

(2) 2期(6・7月)の取組

ア ねらいと内容

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">○ 園での生活の仕方が分かり、身の回りの始末などの生活習慣を身に付ける。<ul style="list-style-type: none">・うがい手洗い排泄など自分でしようとする。・服の脱ぎ着の仕方が分かり、自分でしようとする。・持ち物の始末や身の回りの簡単な始末をする。・遊んだ後の片付けの仕方が分かり、自分の出した物は元の場所へ片付ける。○ 体を動かして遊ぶ事やいろいろな遊びを楽しむ。<ul style="list-style-type: none">・いろいろな遊びのコーナーに自分からかかわり十分遊ぶ。・水、砂、泥などの感触を楽しむ。○ 梅雨期の自然に触れる。 ・雨などの自然現象に興味をもつ。 ・小動物に興味をもつ。○ 遊びや生活の中の必要な言葉が使えるようになる。 ○ 年長、年中児と一緒にする活動を楽しむ。 |
|--|

イ 保育実践より

(ア) クラス全体(6月ごろ) <友達が来たよ>

6月、「おはようボード」を作る。表に幼児の顔写真、裏に個別のマークを張り合わせラミネートしたもので、登園したときは「表」、休んだときは「裏」にする。

*

おはようボードを見て、「先生、なんで○○ちゃんお休みなの？」と問うようになった。「かぜをひいてお熱があるんだって。早く元気になって幼稚園に来れたらいいのね。」と友達の様子に関心をもてるよう話をする。

*

「あっ先生、○○ちゃんが来たよ！」B児が登園してくる姿を見つけ知らせてくれる。「かぜひきが治ったんやねえ。みんなでおはよう言いに行こうか。」と声を掛けると「おはよう、○○ちゃん」と幼児たちも廊下で出迎える。「おはよう、元気になったんやねえ。幼稚園に来るの待ってたよ。お友達も迎えに来てくれてよかったねえ。」と部屋に入る。「おはようボード」の写真が表向きにしてある。「Bちゃん、○○ちゃんのしるし替えてくれたんやねえ。」「うん、来たの見たから替えといた。」とうれしそうな顔をしている。

- ・入園当初は自分のことだけで精一杯だった幼児も、生活を共にするこの時期になると「あの子、この子」から名前を呼び合い、友達に対する親しみが出てくる。
- ・友達に更に関心が向くよう、「ねえ、みんな知ってる？ 今日こんなうれしいことがあったよ。○○ちゃん、こんなことを頑張ってたんだよ。」とエピソードを披露していった。「へえ、すごいなあ。」

と感じることで友達への関心が生まれ、親しみが深まることを願いながら援助していった。

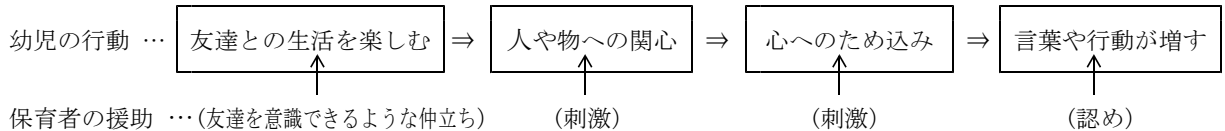
(イ) A児（6月下旬ごろ）〈かえるさん頑張れ〉

「先生見てみ、こっちのかえるのほうがおっきいで。」「わあ！ジャンプした！窓にくっついた。」今までに聞いたことのない大きな歓声を上げ表情が生き生きしている。A児の声に気付いて集まってきた友達も加わって、かえるが窓ガラスを上っていくのを一緒に応援している。かえるが窓ガラスを上っていくことがおもしろく、また、興味をもって集まってきた友達と喜びや関心事が同じであることもうれしいようである。

- ・かえるの数が増えれば友達とのかかわりも増えるのではと考え、かえるの数を増やした。また、沢山いるという年長組の担任と話をし、年長児からもプレゼントしてもらった。
- ・かえるの競争をクラスの友達に紹介する機会を作ったところ、保育者と一緒に喜んでみんなに伝えることができた。このことがあってから友達の遊びにも関心をもち、自分から加わるようになる。
- ・ある朝、A児が担任の肩をたたいて「おはよう！」と登園してくる。今まで声を掛けても小さく応えることが多かっただけに、お母さんにも担任にもうれしい驚きだった。
- ・遊びに満足感が得られるようになると、持ち物の片付けも保育者と一緒にはあるが少しずつしようとする気持ちが見えるようになってきた。「こんなことができるようになったね。」「がんばったね。」と、A児が自分のよさに気付けるような言葉掛けを沢山行っていった。

ウ 保育者が大切にしてきたこと

(ア) 遊びを楽しみながら近くにいる友達を意識できるような仲立ちをしていく。保育者や友達といると楽しいと感じられる雰囲気作りをしていく。



(イ) 幼児が自分でしようとする気持ちを大切にす。すべてに手を貸すのではなく、幼児の発達やその場に応じ必要な援助をする。

- ・汚れた服を着替える → 腕がスムーズに脱げるように上着のそで口を持つ。
- ・鼻をかむ → 左右に分けて片方ずつかめるように手を添える。

(3) 3期（9・10・11・12月）の取組

ア ねらいと内容

- 友達と一緒に同じ遊びをする楽しさを味わう。
 - ・友達やクラスを意識し、遊びの中で少しずつかかわりが出てくる。
 - ・遊びの場や物の取り合いなどのトラブルを経験し、他人の存在や要求に気付く。
 - ・遊びの中で、「貸して」「入れて」「ありがとう」などの言葉が使えるようになる。
 - ・気の合った友達と一緒に同じ遊びやごっこ遊びを楽しむ。
- 経験した事、感じた事、想像した事をその子なりに表現する。
 - ・自分の思いを言葉で伝えようとする。
 - ・身近な素材を使って好きに作ったり描いたり、それを使って遊んだりする。
- 季節の自然に触れ、関心をもつ。
 - ・身近な木々や草花の様子に気付き、遊びにそれらを取り入れて遊ぶ。
- 身の周りの始末を進んでするなどの生活習慣を身に付ける。
- 年長、年中児と一緒に活動を楽しみ、親しみを深める。

イ 保育実践より

(ア) クラス全体（12月ごろ）〈もったいないばあさんがくるよ〉

保育参加のお母さんから絵本「もったいないばあさん」の読み聞かせを聞いたあとで…。

*

「ご飯粒ついてたら、もったいないって言うの蟻田先生みたいやったなあ」「お水たくさん出したらもったいないって言うしなあ」「Dちゃんのおばちゃんの本おもしろかったなあ」読み聞かせ後は何かに付け、「そんなしたら紙もったいない!」「セロテープ使いすぎやん。もったいないことしたらあかんやんか、なあ。」と声を掛け合い、物を大切にしようとする姿が見えてきている。そんな反応をお母さんに伝えると「えっ、そうですか。嬉しいです。子どもたちがそう感じてくれたんですね。次の機会もまた参加します。」と喜んでくださった。

- ・お母さんが絵本を読んでくれるといういつもと違う環境の中、“もったいないよ”と言われ続けてきた意味が、絵本を通して生活と結び付いた瞬間であったようだ。だれかに言われてするのではなく、自分から、「もったいない」という心情が働き出し、広がっていったことが感じられる。
- ・保育参加のお母さんも、自分の読み聞かせが幼児に“よい影響”をもたらしたことを喜び、幼稚園に対して関心と理解をより深めてくださったようである。

(1) A児（11月中旬ごろ）〈お兄ちゃん行って来ます〉

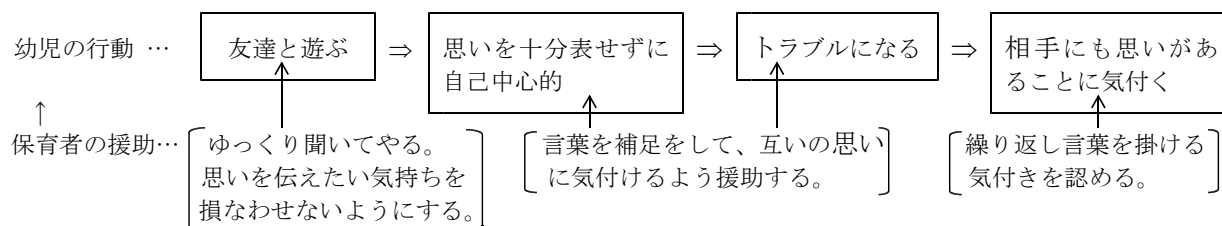
家族あそび…… 一年を通して計画的に交流をもっている年少・年中・年長児のグループが一緒に家作り（ダンボールや廃品を使って）をしながら遊ぶことで、相互により親しみがもてることをねらいとした活動。

「先生、今日も家族あそびあるの?」「あるよ、もうすぐ迎えに来てくれるよ。」「やったあ!」と持ち物の始末をしている。「できたよ!まだかなあ。」表情や行動からうきうきする気持ちが伝わってくる。「Aちゃん行くぞ。」と年長のE児が迎えに来てくれる。「先生、お兄ちゃん行って来ます!」と部屋を飛び出していく。「今日、お兄ちゃんと家の壁に絵描いてん。」「お兄ちゃんテレビ作ってんで。」とお兄ちゃんの行動を喜んで教えてくれる。お母さんから「家族あそび楽しいらしいです。今まで聞いても虫採りしたことしか言ってくれなかったのに、このごろは、家族のお兄ちゃんがしたことをよく話してくれてうれしいです。」と聞く。

- ・4月からかかわってくれているE児に対して、家族あそびで更に“いろいろなことができるすごいお兄ちゃん”と親しみやあこがれが強くなったことが感じられる。
- ・E児の話題がA児の口から出てきたことで、お母さんも異年齢とのつながりの中で受け入れられ大切にしてもらっていることを喜んでおられる。

ウ 保育者が大切にしてきたこと

(7) 友達や異年齢児とのかかわりが深まることで、親しみ・あこがれ・感動・喜び・悔しさ・悲しさなど、幼児の内面・情緒に著しい育ちを感じられるようになってきた。そこで、どう言葉にして相手に伝えるか、あるいは気持ちを整理するか、一人一人のTPOにあった援助を大切にする。



(4) 4期（1・2・3月）

ア ねらいと内容

- 基本的な生活習慣が身に付き、自信をもって生活できるようになる。
 - ・自分から進んで片付けや物の始末をする。
- 友達と一緒に遊んだり、話したりすることを楽しみ、一緒に行動しようとする。
 - ・年中や年長児のまねをしたり仲間に入れてもらったりして遊ぶ。 ・寒さに負けず体を十分動かして遊ぶ。

- ごっこ遊びやわらべうた遊びを保育者や友達と楽しむ。
 - ・伝統的な正月遊びや昔遊びを経験する。
- 作ったり描いたり、動いたりして、自分なりに表現することを楽しむ。
 - ・簡単な話の展開に沿って、おはなし遊びを楽しむ。
 - ・音楽に合わせてリズム楽器を鳴らし、楽器遊びを楽しむ。
- 自然のいろいろな現象に実際に触れながら、季節を感じる。
- 大きくなったことを喜び、進級に期待をもつ。
- 年長、年中児にしてもらってうれしかったことを友達にもしてあげる。

ウ 保育者が大切にしてきたこと

- (ア) 友達の存在が大きくなってきている。そこで、保育者が友達と仲立ちする度合いを少しずつ減らし、友達と一緒にすることの楽しさをもっと味わえるような援助や見守りをしていく。
- (イ) 今まで経験してきたことを繰り返して試みることで、うまくできるようになった自分に気づき、自信をもって生活できるように認めや励ましの言葉を掛けていく。

5 研究結果と考察

実践を通して次の点についての大切さが分かってきた。

- 友達とのかかわりの中で育つことを大切にする
 - ・3歳児は未熟に見えるが、友達や環境とのかかわりで好奇心や探索意欲が促され、めざましく発達する時期である。しかし、一人一人の育ちにはかなりの個人差があることを十分配慮する必要がある。
 - ・個人差は幼児の個性や育ってきた環境、経験の有無によって違う。一人一人がどのような発達をしてきているかを理解し、遊びを通して育ちを促していけるようにする。
 - ・幼児は友達と毎日生活する中で同じ思いを共有する心地よさを味わったり思いがうまく通じずトラブルになって悲しい気持ちになったりすることを繰り返している。そうすることによって、友達と一緒にいる楽しさや喜び、あるいはいやな気持ちをどう整理していくかなどの経験を重ねていく。何ができるかという結果だけでなく、人とかかわりの中で心がどう育っているかも見逃してはならない。
 - ・異年齢児とかかわることで互いに学び合い育ち合えることの大きさを大切にする。
 - 幼児と保育者の温かい信頼関係をつくる
 - ・幼児は保育者に「大切にされている」と感じることで安心して物事に取り組むことができる。その中で幼児が興味、関心をもって体験したことが新たな興味・関心につながっていけるよう環境を整える。
 - クラス全体を早くまとめようとしない
 - ・一人一人が心身全体でいろいろな経験を楽しみ、考え、悩んでいくことを大切に、時間をかけて丁寧に付き合っていく。
 - 保護者と保育者の連携を密にし、よりよい関係をつくる
 - ・幼児のよさ、成長、プラス面を保育者自身の喜びと共に保護者にしっかり丁寧に伝えていく。
 - ・園や担任に対する思いや願いをしっかり受け止めることで、共に子育てを進めていける関係をつくる。
- 幼児が遊びを通して自らいろいろなことに興味を持ち学ぼうとする力を育てるためには、保育者が幼児を理解し、それに応じた援助をしていくことが大切である。更に研究を進めていきたい。

参考文献

- | | | | |
|------------|-------------|---------|-------|
| (1) 柴崎正行ほか | 3歳児保育のすべて | フレーベル社 | 1992年 |
| (2) 柴崎正行 | 環境づくりと援助の方法 | ひかりのくに社 | 1997年 |
| (3) 文部科学省 | 幼児理解と評価 | チャイルド社 | 平成4年 |